

(一財)北海道開発協会では、非営利の市民団体が行う地域活性化活動に対して平成14年度から助成を行っており、これまで145件の活動に支援を行ってきました。これらの活動がさらに発展していくよう平成20年度から助成を受けた団体の方々が活動成果等を発表し、参加者同志が地域づくりについて自由な意見交換をしていただく「助成活動発表会」を開催しています。今回は、令和2年度に助成を受け活動された6団体の成果を紹介いたします。

クローズアップ

令和3年度 地域活性化活動発表会 各地で展開する地域活性化活動をサポート

(一財)北海道開発協会開発調査総合研究所

ハスカップの郷づくりを目指して

活動名：大地震の復興に向けての原風景再興と新ビジネス創出

NPO法人アグリコミュニティ千歳 藤田 和徳氏

アグリコミュニティ千歳の活動拠点である千歳市でのハスカップ栽培は、1970年頃より始まり、ピーク時には道内生産量に占めるシェア50%でしたが、現在は厚真町や美瑛市での栽培面積が増えています。



ハスカップは美容・健康に効用があり、栄養価が高く、ビタミンCはレモンと同等、カルシウムと鉄分はイチゴの2倍、アントシアニンはブルーベリーの2倍です。そのハスカップ栽培も、農家の高齢化、胆振東部地震、新型コロナ禍の三重苦によって、危機を迎えています。

ハスカップの郷づくりにおいて、主な活動として、住民と学生によるボランティア活動で地域協働による6次化農業に取り組んでいます。

また、ハスカップ栽培の魅力&効率を向上するために、地域に密着したスマート農業の実用化を図る協働研究を行っています。草刈りと果実の摘み取りが、最も大変な農作業で、このロボット化が永年の課題です。

カナダの大学では、枝を振れば果実が落ちるように品種改良がされるなど、海外でのハスカップの注目が高まっています。これまで国内でも唯一北海道で栽培されてきたハスカップであり、今後も北海道が先導す

る立場でいたいと考えています。

しかし、課題は農園経営の持続です。この課題解決に向けて、スマート農業の導入を目指しています。公立千歳科学技術大学と地域発スマート農園の開発を行い、同時に産業技術総合研究所と雑草駆除ロボットの実用化に向けた開発を進めています。さらに、観光と食を農家交流に結び付ける体験型旅行形態により、多様な担い手となる関係人口創出のモデルづくり計画を策定する協議を行っています。担い手不足の解決策の一つとして、旅行者が労働力を提供する仕組みの具体化を図っていきます。

地域資源であるハスカップの増強を図る活動を継続して推進します。新たな担い手の誘致や地域発スマート農園の実用化などにより、増産増益へのサポートを強化して、ハスカップ農園の持続に今後も力を入れて取り組んでいきます。

浜ピザで標津産海産物をPR

活動名：標津漁師会

標津漁師会 浅野 将太氏



標津漁師会は、標津町の若手漁師が中心になり、若者同士が協力し標津町の活性化のための環境をつくるため平成28年10月に結成されました。

今回の活動は、標津産海産物と魚食普及を町内外にPRするため、新たなオリジナルピザを作り、購入した移動販売車を利用して、広く提

供するものです。

本格的なピザ生地を作るために帯広の満寿屋パンで指導を受け、このピザ生地に標津産の海産物をトッピングした新たなオリジナルピザ「浜ピザ」を作りました。

移動販売車の購入以前は、炭を使った鉄製のピザ窯を利用していただけ、温度調整も難しくピザの焼き時間もかかり、特に町外で使用する際は、非常に労力もかかり大変でした。購入後は、ガス式のピザオーブンを車内に設置したことで、こうした課題は解消されました。

移動販売車の利点は、なにより機動性に優れ、実店舗に比べ初期費用のコストが抑えられます。また少人数でも運用でき、コロナ感染対策もしやすくなります。しかしコロナ禍の影響は大きく、魚食普及のために予定した地域イベントは、ほとんどが中止となり、緊急事態宣言下では活動ができませんでした。結果的には、尾岱沼竜神花火と町内商工会前の青空広場で2回の実施となりしたが、移動販売車による効率の良さを実感することができました。

今後の活動では、コロナ禍の状況を見て、移動販売車の機動性を活かし、標津の海産物が届かない場所で標津をPRして地域を盛り上げたいと思います。

正規ルートに向けた活動強化

活動名：知床ねむろ・北太平洋シーニックバイウエイ
地域の魅力度向上事業

知床ねむろ・北太平洋シーニックバイウエイルート運営代表者会議 伊藤 泰通氏

根室管内の1市4町と釧路管内の3町を結ぶ国道および道道のルートは、シーニックバイウエイ北海道の候補ルートの一つとなっています。当運営代表者会議は、2019年にルート上で活動する24の活動団体が集まり活動を開始し、2022年度の正規ルート申請に向けて活動を強化しています。

今回の活動では、運営団体の活動財源の確保と継続に関わる高齢化の問題を解決するため、①地域の魅力



を高めるロゴマークを活用した土産品の開発。②ルート内資源で連携したツアー・イベントの開催。③フットパスの整備における草刈り体験のイベント化の3点について活動を行いました。

まず、ロゴマークを活用した土産品の開発では、知床ねむろ・北太平洋シーニックバイウエイ独自のロゴマークと6つの各ルートをイメージしたサブアイコンをデザインしました。

当ルート独自のロゴマークには、ラムサール条約登録湿地や知床世界自然遺産などを象徴して「オオワシ」をデザインし、ルート1～6のサブアイコンには、それぞれ「シャチ、灯台、エゾカンゾウとアヤメ、カヌー、フットパスを歩く人、開拓時代の拓殖軌道」をデザインしました。この各ロゴマークを活用したトートバッグとサーモボットのオリジナル商品の製品化と販売を検討しました。

コロナ禍による自粛等の長期化に伴い、まずは、地元を見直す旅の応援キャンペーン「ジモトナタビ」で、新しいドライブ観光を提案し、その企画に対するアンケートの回答者にオリジナル商品をプレゼントし反応を見ることとしました。トートバッグの販売は来年度改めて計画しますが、オオワシのロゴマーク以外、サブアイコンのバッグは各ルートの道の駅のみで販売し、購入者には周遊しながら集めてもらうサービス構成を考えています。

ルート内資源で連携したツアー・イベントは、令和2年10月のコロナが落ち着いた時期に「旧標津線を巡る秋のフットパスツアー」を実施しました。ツアーは、旧奥行白駅通所の史跡を起点に旧標津線のフットパスを歩くもので、開拓の歴史を詳しく解説することで満足度の高いものに仕上げ、本州からも3名が参加するなど、有意義なものになりました。

高齢化により維持整備が困難になりつつあるフットパス整備の活動は、当会議の構成団体が連携して草刈り等を実施する一方、旧標津線跡の草刈りをボランティアツアーとする仕組みづくりを検討しました。

今後は、道の駅におけるトートバッグなどのオリジナルグッズ販売によって財源を確保し、様々な体験観

光を取り入れたツアーを企画していくことにより、当ルートの魅力向上につなげたいと思います。

さっぽろラウンドウォークの運営開始に向けて

活動名：健康と観光の両面に寄与するさっぽろ周回パスの設定

エコ・ネットワーク 小川 巖氏



エコ・ネットワークでは、イギリス発祥のフットパスの活動を通じて、地域の活性化に取り組んでいます。

各地のフットパスを見ると、韓国済州島を一周する約450kmのオルレと呼ばれるコースがあります。九州と宮城県は、この済州島のスタイルを取り入れた「九州オルレ」と「宮城オルレ」のコースがあります。九州オルレは、400kmほどのコースが出来ています。このほか、全長110kmで若者や経験者向けの信越トレイルのように長野県と新潟県の境の稜線を歩くものもあります。

我々は、フットパスの長距離化を目指しておりますが、札幌市内の既存のコースを繋ぐ周回化によって、市内を一周する百数十kmのコースを目指しています。

札幌市内を周回するフットパスづくりは、3年前から北大とエコ・ネットワーク、札幌市、観光協会によって取り組んできました。国内の地域を周回するコースとして、京都一周トレイル132kmや、広島湾岸トレイル291kmがあります。札幌の周回フットパスは、トレイルという名称は使わず「さっぽろラウンドウォーク」としました。

コース選定は10年以上前からコースとなりそうな地域を市民と歩いてきましたが、今年も20回ほど市民と一緒に歩いています。設定した周回コースは140kmになることが決まり、3つのタイプが異なるコースを繋いだ形になっています。南側は藻岩山を含めた山岳地帯、北側の田園地帯などもコースに入っています。再来年にはコースの道標を設置する予定です。

さっぽろラウンドウォークの管理運営は、昨年度NPOを設立して準備を整えました。PRのためのフォー

ラムは、令和3年3月22日にオンラインで開催し、京都・広島トレイルの事例や、さっぽろラウンドウォークの現状と課題が報告されました。

今後は、札幌市民にも140kmあるコースを一つでも、二つでも歩いて体験していただきたいと思います。また、札幌に滞在する観光客の多くが1泊で次の目的地へ移動することが多いようですが、札幌市内のフットパスを歩いてもらえたらと考えています。そうすれば、滞在時間の延長にもつながり、結果的に地域の活性化へと繋がることから、継続して活動を行っていきます。

ローカルSDGsの達成に向けて

活動名：製炭炉での未利用資源エネルギー化循環モデルづくり

NPO法人北見NPOサポートセンター 谷井 貞夫氏



今回の活動は、福祉事業と環境保全事業との融合によるローカルSDGsを実現するものです。従来の障害者就労では、サービス業が多かったのですが、製造業分野に就労場所を広げたいと考えました。

実施にあたり、当NPOの経営指導をいただいている大阪の先生から、製炭炉による炭作りの話を聞き、北海道での実現について取り組むこととしました。使用する製炭炉は、林産資源以外に公園の芝等の環境廃棄物や、農業廃棄物、貝殻や傷んだ漁網等の漁業廃棄物を炭化する能力を有しています。その製炭炉を使った障害者就労のためのセミナーや研修会の実施、およびオホーツク管内での資源調査を行いました。

セミナーでは、製炭炉を開発した高槻バイオチャーエネルギー研究所の方に講師を依頼し、バイオマス資源の活用や、プラスチック資源を炭化できる可能性、さらにはバイオチャー^{*1}の取組みと市場の動向についてお話を聞き、今後のエネルギー化、SDGsについて勉強しました。

資源調査では、オホーツク管内は農業も漁業も大規模な方々が多く、資源が循環する仕組みになっていますが、大規模がゆえ採算性の合わない端物が捨てられ

*1 バイオチャーは、土壌改良に使用される木炭の一種。

ていることが分かりました。道路の街路樹剪定で出る枝の資源や、小規模な農家兼業の林業者が薪を供給しており、薪が余ったり市場に出せないものがあることが分かりました。漁業分野では、唯一処理が進んでいない漁網の問題があります。製炭炉による漁網処理に関する漁業関係者のニーズも分かりました。

セミナー等の活動を通じて、私たちの事業がSDGsや脱炭素の流れに沿った事業であることを理解していただきました。

今回、製炭炉を動かした結果、炭の効果的な製造のためには、材料毎の炭化のデータ蓄積が必要と考えています。また障害者就労支援のための作業マニュアルを作成することも重要です。将来的には、安定したバイオマス資源を確保するとともに様々な利用方法を開発していきたいと考えています。事業全般の資源調達から販売までのコストパフォーマンスを向上させ、他の事業や各法人と連携し、地域課題の解決と併せてSDGsの実現を目指していきたいと思っています。

鶴居村農泊宣言の推進

活動名：鶴居村ガストロノミーツーリズム・プロジェクト

NPO法人美しい村・鶴居村観光協会 服部 政人氏

鶴居村観光協会が目指す旅作りは農泊です。平成29年度に農水省が新しい旅のスタイルとして、農山漁村で中長期に暮らす旅を推進しました。

鶴居村は、釧路湿原を有する2,600人の小さな村で、タンチョウが生息し、乳牛が草を食む牧歌的な風景という地の利を活かし、鶴居村版ガストロノミーツーリズム^{*2}に取り組んでいます。地域の食、鶴居村は酪農が基幹産業の村ですから、美味しい牛乳やチーズなどの乳製品を提供できます。加えて鹿肉等のジビエ^{*3}も利活用したいと考えています。さらに3年前から鶴居村もクロンヌルージュという池田町の山幸の品種を使ったワインが出荷できるようになり、また来年の夏以降には、クラフトビールが



製造・出荷される予定です。

鶴居村では、地産地消と旬の味覚を入口として、地域の文化やエゾ鹿肉が食卓に届くまでの経緯も観光の対象となると思っています。小さな村ですので、何10万人も観光客を集めるのではなく、身の丈にあった一緒に交流できる旅を目指しています。

コロナ禍の長期化により、食の重要性も今回の事業で訴え、ワーケーション^{*4}事業とともにマイクロツーリズム^{*5}を中心にした取り組みを紹介できました。

緊急事態宣言により、観光PRが自粛されたことで、観光関係の団体機関の協力を得て、ガストロノミーツーリズムに関する冊子を作製し広く配布しました。この冊子を切っ掛けに、鶴居村の商工会青年部が中心となり、チーズを作った時に出るホエー（乳清）と鹿肉を活用した新たな商品開発をしています。

鹿肉は鶴居村だけでなく、道東の各地域で取り組んでいける素材だと思います。ジビエ料理は、安全安心に敏感な女性や家族層、シニアの方々に好んで食べていただけるようですので、セレブな方が中長期滞在の切っ掛けになると大きな確信を持ちました。今後ジビエを食べるなら鶴居村と言われるように取り組んでいきたいと思っています。

行政も、ハンターや食肉加工処理の体制構築において、一生懸命対応いただき、鹿肉ジビエ料理は、メニューのレギュラー化に向け、いい形になっています。村の体制が整備されていけば、ふるさと納税でもこのツアーを売っていくことを観光協会では考えています。

今回は食を活用した事業を実施しましたが、食だけではなく、景観や交流を核とした観光機会の提供にも取り組んでおり、今後は、ワーケーションとしての場所の提供や、道内客へのアプローチを検討していきます。既にパンフレットで紹介しているように、弟子屈町、標茶町、鶴居村が広域的に連携しながら1週間以上の旅づくりを進めています。今後も食を中心に「鶴居村農泊宣言」を進めたいと思っています。

*2 ガストロノミーツーリズムは、土地の食文化に触れることを目的としたツーリズム。

*3 ジビエは、フランス語で、狩猟で捕獲した野生鳥獣の肉や料理のこと。

*4 英語のWork（仕事）とVacation（休暇）の合成語。リゾート地や地方部など、普段の職場とは異なる場所で働きながら休暇取得を行うこと。

*5 自宅から1～2時間の距離の近場でおこなう旅行や観光。